
「海の生き物を守る会」メールマガジン No.43

2009. 7.17 (金)



Association for Protection of Marine Communities (AMCo)

Homepage : <http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html>

「今日の海の生き物」 カニノテ *Amphiroa dilatata*

サンゴモ科に属する紅藻類で、石灰質を体内に含むので石のように固い。体は平たい節をつないだようになっているが、次々と二分岐するので、藻体全体では扇形をしている。岩の上に付着器で付着し、全体は岩上を覆うように平たく生育している。潮間帯中部から下部の大型海藻類の下生えとして生育する。大きさは 10cm 以上になり、石灰藻類の中では比



較的大型である。本州の太平洋側中部・日本海側中部より南の太平洋全体に広く分布する。孢子嚢は体の裏側にできる。

(千葉県小湊にて向井宏撮影)

目次 「今月の海の生き物」カニノテ

1. 海の生き物とその生息環境に関するニュース
2. 現在の活動と予定
3. 活動報告
4. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報
5. 連載エッセイ（8）

「自分さがしの自然観察—私たちはなぜ生きている」横濱康継

6. 事務局便り
7. 編集後記
8. 「うみひろも」と「海の生き物を守る会」について

1. 海の生き物とその生息環境に関するニュース

【全国】

●漂着ゴミ対策で新法が成立

海岸に漂着するゴミの対策に苦慮してきた自治体や、ゴミ拾いを行ってきた NPO などの団体から、法律による対応が望まれてきた問題で、現国会において漂着ゴミ対策法が議員提案で提出され、成立した。

現在の法律では、海岸管理者の責務が清潔保持の努力義務に留まっていることから、回収した市町村の費用負担が重く、他地域からの漂着・流入が多い地域では、対応できなくなっていた。また、現場で対応してきたボランティアなどをコーディネートする NPO、NGO の体力にも限界があり、なるべく早い法整備が望まれていた。

海ごみ被害のひどい地域の一つでもある山形県酒田の NPO から地元選出の加藤紘一代議員に資料提供と問題提起をしたことが契機となり、2006 年 3 月に、自民党で勉強会が開かれ、特別委員会が作られ、被害自治体関係者や、省庁、NGO などからのヒアリングや意見交換を重ねて、課題の一つである法整備に取り組むこととなったもの。その後、公明党や民主党にも NPO の働きかけによって委員会が作られ、急遽超党派の議員提案で成立した。

海洋ごみを廃棄物行政のなかでどう位置づけるか、海洋ごみの定義などの議論がまだ十分ではなく、流木などの自然物をどう扱うかなど今後残された問題も多いが、とりあえず一歩進めることが重要であると判断した結果であった。

海の生き物を守る会が参加している「海洋環境政策ネットワーク」も、以下のような問題点を指摘してきたが、法整備には賛成した。問題点としては、(1)漂着したごみだけではなく、その予備軍でもある漂流、浮遊、海底ごみなども範疇に含めるべき、(2)審議会の設置を、(3)国としての基本計画をまずつくるべき、(4)計画策定（国、地域）への市民参加を、

(5)事業者責任も明確にすべき、など。とくに、自然物を対象に含めることには大変問題が多いと思われる。

●特定港湾整備事業費 525 億円が閣議決定

今年度の特定港湾整備事業費として、政府は7月14日に525億円の支出を閣議決定した。その中身は、臨海部の土地造成事業として236億8500万円が高松港や茨城港などで業務用ビルの建設用地や工業用地造成に使われる。一方、港湾機能施設整備事業に288億5500万円があてられ、埠頭用地の造成やクレーンの建設などに使われるという。

●今年のエチゼンクラゲが大量に出現か

最近、毎年のように大量のエチゼンクラゲが日本海沿岸に現れ、漁業などに被害をもたらしている。ところが昨年はゼロであったため、クラゲの問題は一過性かと言われてきた。しかし、今年は再び大量のエチゼンクラゲが日本海沿岸に押し寄せている。

上 真一広島大学教授によると、6月下旬に黄海南部で調査した結果から、今年は06年や07年よりもきわめて多くのエチゼンクラゲが発生しており、日本海沿岸に大量のエチゼンクラゲが現れるだろうと予測している。事実、7月に入って日本海沿岸の各地で大量のエチゼンクラゲが見られるようになってきている。

最近の研究によると、エチゼンクラゲの大量発生の原因は、黄海の海洋汚染が原因であり、さらにその原因は、黄河の大規模ダム建設だという。近年あの大河といわれる黄河では、ダムの下流に水が無くなる現象が起こっており（欠水）、上流域の大規模利水と気候変動が原因だとされている。エチゼンクラゲの大量発生を三段論法的に書くと、

ダム建設→ダム湖における珪藻赤潮の発生→珪素の沈殿→河口域での栄養塩（珪素）の欠乏+富栄養化（窒素・リン）→渦鞭毛藻（植物プランクトン）の増殖→腐食食物連鎖の卓越→クラゲの大量発生

となるという。この論理が少しずつ証明されつつある。

【東北】

●青森県佐井の川にワモンアザラシが出現

青森県佐井村の中心部を流れる佐井の川の河口から150mほど遡った中州で、ワモンアザラシの親とみられる個体がのんびり昼寝を楽しんでいるのが発見された。漁業者によると、冬から春先に沖合でアザラシ類を見かけることはたまにあるが、岸近くに現れることはほとんどないとのこと。最近、あちこちの川にアザラシ類が出現して話題になっているが、これらの現象に関連性はあるのだろうか。もしあるとすればいったいそれは何が原因なのだろうか。気になるニュースである。

●松浦・青島でヒラタブブクを駆除

ウニの仲間である歪型のブンブクチャガマの一種であるヒラタブンブクは、浅い砂の海底に棲んでいるが、松浦市の青島の島民が、海水浴場からヒラタブンブクを集めて駆除した。島民70人が1時間で約300個体のヒラタブンブクを駆除したという。ヒラタブンブクは無毒で泥成分を食べるおとなしい動物だが、トゲを持っているために砂の表面を歩いているときに素足で踏んづけるとトゲが刺さることがある。そのために海水浴客には歓迎されていないというのが駆除の理由だが、海の生き物のいない海がお望みならプールで泳げばいい。生き物がいてこそ、海水浴だと思うのだが。

【関東】

● 沖合5kmまでを国立公園に 小笠原

環境省は、国立公園法の改正を目指しているが、衆議院の解散で改正案を国会に提出できなかった。しかし、小笠原諸島の国立公園を世界遺産登録と来年の生物多様性条約締約国会議（COP10）に向けて拡大する方針を明らかにした。拡大するのは、海では、ザトウクジラなどの海洋動物の生息地として沖合5kmまでを国立公園に拡大し、サンゴ礁を7ヶ所海中公園地区に指定するというもの。

これまで国立公園の中で海は沿岸から1kmを一律に指定し、しかし実質上は海の管理はほとんど行わなかったのに対して、新しい自然公園法改正案では、陸上と同じように特別保護区域を海にも設定できるようにし、陸と連続した干潟や海岸をも含むことができるようにした。今回の小笠原諸島国立公園の拡大は、自然公園法の成立を見越したもので、法改正が行われたときは、海中公園地区を海中特別保護区にする予定と思われる。

● 横浜・山下公園などで砂浜の再生を要望

NPO「ともに浜をつくる会」が横浜市の沿岸に砂浜を再生するよう、横浜市に12659人の署名を添えて要望書を提出した。現在、開発などによりほとんどが埋め立てられた横浜市内の海岸線には、野島海岸にわずか100mくらいの自然の砂浜が残るのみとなっている。

同会は、砂浜再生が可能な場所を調査した上で、候補地を含めて具体的な計画案を作成し、市に要望書をだしたもので、とくに「候補地のうち、野島海岸と山下公園を最優先で取り組んでほしい」と希望している。これに対し、荻島尚之環境創造局長は「多くの市民から要望があることを受け止めた。港湾局など関係部局と話をしていきたい」と話している。

● 漁協側主張の科学的根拠示す

那珂川流域の県内3漁協と栃木県内の漁協連合会が、霞ヶ浦導水事業の那珂川取水口建設に反対し、国に工事差し止め仮処分を求めている裁判で、漁協側は第9回審尋で、これまでの主張を補完する証拠書類を水産関係者の陳述書や、意見書などで主張の科学的根拠を示して提出した。審理は国の反論に対して漁協側が科学的な証拠集めに時間がかかっている。

ることなどから予定を大幅に遅れ、今年の12月4日に結審することとなった。

●常陸那珂港区で埋め立て

茨城県ひたちなか市の茨城港常陸那珂港では、港区内の中央埠頭地区の埋め立て工事を進めている。現在、工事区の沖合で不発弾が見つかり、一時的に埋め立て工事が中断している。

【東海】

●知多半島で今年初のウミガメ産卵

愛知県南知多町の内海海岸で、7月4日に知多半島では今年初めてのアカウミガメの産卵が始まった。知多半島では昨年、過去最多の16回の産卵が確認されており、各地で始まっているウミガメの産卵に、今年も多くウミガメが産卵に来るとの期待が高まっている。

【中四国】

●ミズクラゲ越冬 年二世代が発生

広島大学の上真一教授らの研究によると、瀬戸内海西部でミズクラゲが大量に発生して、越冬していることが明らかになった。普通は、ミズクラゲは秋に消滅し、冬にはポリプの状態で海底で越冬することが知られているが、上教授によると冬も第二世代がクラゲの形で越冬しているという。遺伝子の調査では、これまでのミズクラゲ個体群と同じであったので、高水温化に対応した生活史の変化ではないかと思われる。

●テングサが海水温上昇で生育悪化

徳島県の牟岐町は、テングサの産地として有名だが、今年はテングサの生長が悪く、昨年までの半分以下の生産量になりそうだという。生産量が最大だった25年前の100トンに比べると、実に1割以下だ。原因は、海水温の上昇に加え、昨年は台風の上陸がなく海底の堆積物が除去されなかったことで、生育環境が悪化したからという。

【九州】

●諫早干拓北部排水めぐって、知事が漁業者と農家に陳謝

諫早湾干拓事業をめぐって、漁業者と国や長崎県との係争が続いている。今月3日には、先月末から続いた大雨によって干拓地の後背地になる森山地区の水田が冠水した。県は汐受け堤防の北部排水門を開けて調整池の水を漁業者の反対を押し切って開けたため、漁業者が堤防管理事務所に押し入る騒ぎが起こった。

金子知事は定例の記者会見で「結果的に両方に迷惑を掛けた形になった。申し訳ないと思っている。今後よく話し合い、このような事態が二度と起きないようにしたい」と陳謝した。さらに知事は「本来なら北部と南部の排水門から同時排水すべきだったが、アサリ

などの成育がいいので排水を慎重にやってほしいという漁業者の要望を考え排水がうまくできなかった。冠水が続くと稲作が駄目になる。どちらの気持ちも分かり難い問題だ」と述べた。再発防止について「普段は南部からできるだけ排水し、調整池の水位をできる限り下げておくようにしたい」とした。事業の防災効果については「潮受け堤防を閉め切ってからこういった事態は初めて。漁業者に配慮し北部排水門から排水しなかったから起きた問題で、干拓事業の防災機能に問題はない」と述べ、漁業者に責任を押しつけた格好だ。しかし、問題の解決は最初からこのような干拓事業をやる必要があったのかどうか、常に原点に戻って考える必要がある。

●天草に原発計画

熊本県天草地方に原発の建設計画が持ち上がっており、反対する住民が7月12日、天草市民センターに集まって「原発ではなく太陽を！天草宝島ネットワーク」を結成した。今後、原発によらないで太陽光などの自然エネルギーを利用した発電を呼びかける運動を始める。

●蒲江海岸でハマユウが見頃

大分県佐伯市の蒲江の高浜海岸では、砂浜に咲くハマユウがたくさん咲き始めた。ハマユウはヒガンバナ科の海辺に生育する植物で、白い花を優雅に咲かせる。蒲江では、かつて日本一のハマユウの里づくりを目指したこともあり、多くの海岸で9月頃まで鑑賞できる。

【沖縄】

●準備書の審査はじまる 辺野古米軍基地建設

アメリカ軍普天間飛行場の代替え施設辺野古基地建設に関する環境影響評価（アセス）準備書が、沖縄防衛局から提出されたことを審査する沖縄県環境影響評価審査会（津嘉山正光会長）が開かれている。すでに2回の審議が行われた。辺野古地区にはジュゴンが生息していないとする準備書に関して、単年度調査では調査が不十分ではないかと津嘉山会長からの質問に対して、防衛局では「すべてが分からないと保全措置が講じられないということではかならずしもない」として、保全対策は十分であると主張した。

2. 現在の活動と予定

●今年も砂浜海岸生物調査を継続しています

砂浜海岸生物調査をいっしょにやりませんか

海の生き物を守る会では、昨年からNPO法人OWSと共同で全国の砂浜海岸生物調査を実

施してきました。引き続き今年も砂浜海岸生物調査を行っていきます。日本の砂浜を生き物のために取り戻そうと計画された調査です。調査は誰にでもできる方法で計画されていますので、少しでも多くの方が、多くの海岸でこの調査に参加していただけるようお願いいたします。ご協力いただける方には、方法と調査報告用紙をメールでお送りいたします。当会のホームページ <http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html> にも掲載しています。

3. 活動報告

●安房小湊で観察会と講演会を開催

2009年7月4日（土）に千葉県小湊で観察会と講演会を行いました。講演会では、京都大学の久保田信准教授に「温暖化と生物相の変化」について、多くのスライドを用いて講演を行っていただきました。参加者は10名でした。観察会は千葉大学の平野弥生さんに指導していただき、参加者全員で小湊湾でスキンドайビングを行いました。美しいウミウシ類などを観察できました。参加者は4名でした。

なお、8月16日に白浜で行う予定だった次回の観察会と講演会は10月以降に延期しました。

4. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報

【国際】

●2009エコセミナー（北米太平洋岸北西部視察ツアー）

福岡大学環境未来オフィスは、持続可能な開発のための教育とコミュニティ・アウトリーチの一環として、2007年度から毎年、北米太平洋岸北西部の先進的な環境の取り組みを視察するツアーを開催しております。今年度のテーマは「持続可能な港湾開発と水辺の生物多様性」です。成田からの合流もOKですので、ぜひふるってご参加ください。

【2009エコセミナー（北米太平洋岸北西部視察ツアー）概要】

産業の基盤である港湾地区の水環境問題とその対策を中心に取り上げ、海浜の環境保全とエコビジネスについて考えます。バラスト水、雨水質の改善、湿地等の動植物生息地の修復におけるこれまでの取り組みや現在の状況について、北米（シアトル、タコマ、バンクーバー）の行政、企業の施設等で講習会や見学を通して学習します。また、持続可能なコミュニティ開発のために、大学が推進するサステイナブル事業についても検証します。（日本語通訳が帯同します。）

主な訪問先 タコマ港湾局 Gog-le-Hi-Te 復元湿地 Todd Pacific 造船所 シアトル港 バンクーバー港 ブリティッシュ・コロンビア大学持続可能性オフィス 日本国総領事館（シアトル、バンクーバー）

主催 福岡大学環境未来オフィス

研修期間 2009年9月19日（土）～9月26日（土）

参加対象 社会人 大学院生

参加定員 約14名 定員になり次第締め切ります。最少催行人数10名。

参加費 ￥390,000 ホテルは1人1室です。朝食6回、昼食6回、夕食4回分を含みます。燃油サーチャージや為替の変動による差額が生じた場合は調整させていただきます

申込方法 所定の申込書に記入し、添付資料（パスポートのコピー）と一緒に申し込み先の日通旅行まで郵送でお送りください。申込書は、問合せ先もしくは福岡大学環境未来オフィスのサイトから取得することができます。

http://ews.tec.fukuoka-u.ac.jp/osf/9es/9seminar_1.htm

後援 九州経済産業局 福岡県 福岡市 北九州市 （財）福岡県環境保全公社リサイクル総合研究センター （社）九州経済連合会 福岡商工会議所 北九州商工会議所 北九州環境ビジネス推進会 カナダ政府西日本通商事務所 在日カナダ・ブリティッシュコロンビア州政府事務所 福岡日米協会 福岡カナダ協会

お申し込み先

日本通運（株）福岡支店 福岡旅行センター （担当：古賀）

TEL 092-291-5455 FAX 092-291-5612

〒812-0034 福岡市博多区下呉服町 1-1 日通ビル 1F

セミナー事務局

福岡大学環境未来オフィス （担当：大和）

TEL 093-751-9975 FAX 093-751-9976

〒808-0002 北九州市若松区向洋町 10 福岡大学資源循環・環境制御システム研究所内

Eメール sikanken@adm.fukuoka-u.ac.jp HP <http://ews.tec.fukuoka-u.ac.jp>

【関東】

●水中スケッチ画家 近藤ちひろ個展&トーク

個展「海の島の虹とシマ唄」入場無料

日時：2009年8月17日（月）～23日（日）月～土：11:00～19:00 日：11:00～17:00

場所：東京銀座 AC ギャラリー（銀座 5-5-9 阿部ビル 4F 03-3573-3676）

個展「楽園の神さまたちの唄」入場無料

日時：9月19日（土）～27日（日）10:00～19:00

トーク&ライブ（前売り 1000円、当日 1500円）

日時：9月19日（土）18:00~

場所：経王寺本堂（東京都新宿区原町1-14）<http://www.kyoouji.gr.jp>

問い合わせ先：03-3341-1314

●第49回 海のトークセッション

「知られざる微小貝の多様性」 ゲストスピーカー:長谷川 和範

(国立科学博物館、動物研究部、海生無脊椎動物研究グループ研究主幹)

近年、生物多様性保全の重要性が広く認識されるようになってきました。しかし、多様性を守るためには、まず地球上にどんなに様々な生物が存在しているかを正しく知る必要があります。それは分類学者の仕事です。貝類は、分類学的に比較的よく調べられているグループの一つではありますが、膨大な未知の部分が残されています。成熟しても数ミリに満たない、いわゆる微小貝です。手の届く波打ち際にもたくさん棲んでいながら、ほとんどその存在すら知られていない微小貝の多様性とその研究の現状について紹介します。

開催日 2009年7月29日（水） 19:00~20:30 (18:30 受付開始)

会場 モンベルクラブ渋谷店 5F サロン

渋谷区宇田川町11番5号 モンベル渋谷ビル

参加費 800円

定員 40名程度(最少催行10名)

申込み OWS ホームページから事前にお申し込み下さい。

※詳しくはこちらをご覧ください。 ⇒<http://www.ows-npo.org/activity/ts/index.html>

●「外来生物分布拡大予報勉強会：東京湾の外来海洋生物、その生態と過去、現在、未来」

日程：7月25日（土曜日）10:00~11:50

会場：東京海洋大学 海洋科学部 品川キャンパス 2号館 2階セミナー室

(JR品川駅港南口（東口）から東に歩いて約10分)

発表内容：

小池文人さん（横浜国立大学）「はじめに」

岩崎敬二（奈良大学）「日本の外来海洋生物：現状と将来」

土井航さん（東京海洋大学）「チチュウカイミドリガニの生態」

小池文人さん・岩崎敬二「チチュウカイミドリガニの分布拡大予報」

青野良平さん（日本貝類学会会員）「京浜運河の外来貝類：1975年からの長期定点観察の結果」

11:50~12:40 昼食後、バスなどで移動して・・・

「京浜運河の外来海洋生物観察会」

日程：7月25日（土曜日）13：00～15：00

場所：京浜運河大井北埠頭橋付近（日本では、狭い面積で最も多くの外来海洋生物が観察できる場所です）

案内：青野良平さん（日本貝類学会会員）・岩崎敬二

内容：京浜運河の干潟で、イガイダマシ、コウロエンカワヒバリガイ、ミドリイガイ、ムラサキイガイ、シマメノウフネガイ、アメリカフジツボ、チチュウカイミドリガニなど、多くの外来海洋生物が観察できます。

●グラスルーツ（草の根）イベント in パタゴニア

アウトドア製品メーカーのパタゴニアでは、草の根市民団体による環境保護キャンペーンを支援して「グラスルーツイベント」を行っています。「北限のジュゴンを見守る会」では、以下の要領でイベントに参加します。

日時：7月19（日）－20日（月・海の日）11:00~20:00

場所：パタゴニア渋谷店（渋谷駅または原宿駅からそれぞれ10分、明治通り）

●パタゴニア・スピーカーシリーズ

「絶滅の危機からジュゴンを救う！～沖縄インターンシップ・プログラム報告～」

日時：7月23日（木）20:30～

場所：パタゴニア渋谷ストア

スピーカー：土屋 彰（パタゴニア神田ストア勤務）

定員：80名

申し込み：パタゴニア渋谷ストアまで

URL: <http://www.patagonia.com/web/jp/patagonia.go?assetid=8236>

【中部】

●水中スケッチ画家 近藤ちひろ個展&トーク

個展「海の島の虹とシマ唄」入場無料

日時：2009年7月11日（土）～8月6日（木）

場所：ウエスティン名古屋キャッスルホテル（名古屋市西区樋の口町3-19 052-521-2121）

【近畿】

●高木仁三郎市民科学基金 成果発表会 2009 in 京都

日時：2009年7月26日（日）13:00~17:30

場所：キャンパスプラザ京都 第3講義室（京都駅西側）徒歩5分

参加費：1000円（資料代）

申し込み：FAX:03-3358-7064 または info@takagifund.org まで24日までに

海関係の発表は

3. 三浦の自然と大村湾の環境を守る会「大村市西部町江川流域の水質調査および江川河口海域の生態系の把握」
5. 輛まちづくり工房「輛港埋立架橋阻止に要する「亀の甲（亀甲状石積み）の調査」
7. 北限のジュゴンを見守る会「市民による沖縄のジュゴン保護のための野外調査、文化調査とそれに基づく保護ロードマップの構築」
8. 長島の自然を守る会「上関原発予定地長島の生態系の解明と詳細調査によるダメージの検証及び地域再生に向けた実験的試行」

【中四国】

●シンポジウム「宝石サンゴとワシントン条約」

開催趣旨：

人類が海産宝石サンゴを装飾品として利用した歴史は古く、3万年前の旧石器時代に遡る。19世紀までは、イタリアを中心とする地中海で採集されたベニサンゴが宝飾品、装飾品、医薬品として世界各地に流通していた。明治初年に高知県で宝石サンゴの漁獲が始まると、地中海産よりも質が良いことから世界に流通するようになった。長年にわたる漁獲により資源の枯渇が心配されている。そのため、2007年6月に開催された第14回ワシントン条約締約国会議で宝石サンゴの国際商取引を規制する提案（附属書Ⅱへの掲載）が提出された。この提案はいったん第1委員会可決されたものの本会議で否決された。その後中国が自国の宝石サンゴ4種を附属書Ⅲに掲載を求めたため、2008年7月より国際取引の規制が始まった。来年3月に開催される第15回ワシントン条約締約国会議では、附属書Ⅱ掲載の提案が再度行われる見通しである。

本シンポジウムでは、海洋生物資源の所有に関する基本的な概念、ワシントン条約での海産物の取り扱い、宝石サンゴに関する科学的知見を紹介する。それら共通の認識に基づき、様々な立場から宝石サンゴ附属書・掲載の是非や持続的利用の可能性について議論する。

日時：2009年7月18日（土）午後1時30分（午後1時受付）

場所：高知大学人文学部第1会議室（高知市曙町2-5-1）

参加費は無料。参加を希望される方は、メールで7月10日（金）までにお申し込み下さい。

新型インフルエンザの流行により開催を中止する場合があります

- 13:30～14:10 「海洋生物資源は誰のものか」 秋道智彌（総合地球環境学研究所）
- 14:10～14:50 「ワシントン条約における海産物」 赤嶺 淳（名古屋市立大学）
- 14:50～15:20 「海洋生物資源の持続可能な利用に向けた取り組み」 諸貫秀樹（水産庁）
- 15:30～16:00 「宝石サンゴとワシントン条約、附属書・掲載の問題点」 岩崎望（高知大学）
- 16:00～16:30 「宝石サンゴをめぐる国際取引と資源管理」 高橋そよ（トラフィック イーストアジア ジャパン）

16:40～17:30 パネルディスカッション・質疑応答

各講演者、長谷川浩（金沢大学）、西内年亀（日本珊瑚商工協同組合）

18:30～20:30 懇親会（高知市内を予定）

主催及び連絡先：科学研究費補助金「宝石サンゴ類の持続的利用と適切な国際取引管理に関する研究」（代表 岩崎望）による研究集会

電話 088-844-8213: E-mail: iwasakin@cc.kochi-u.ac.jp

後援：生き物文化誌学会、日本珊瑚商工協同組合、トラフィック イーストアジア ジャパン、東海大学出版会

【九州】

●パタゴニア・スピーカーシリーズ

「絶滅の危機からジュゴンを救う！～沖縄インターンシップ・プログラム報告～」

日時：7月17日（金）20:30～

場所：パタゴニア福岡ストア

スピーカー：土屋 彰（パタゴニア神田ストア勤務）

定員：80名

申し込み：パタゴニア福岡ストアまで

URL: <http://www.patagonia.com/web/jp/patagonia.go?assetid=8236>

5. 海の生き物とその環境に関する出版物の紹介

●倉谷うらら著「フジツボ 魅惑の足まねき」 岩波科学ライブラリー159 pp.118 岩波書店 ¥1,500+税 (2009)

フジツボに魅せられた著者の思いが伝わってくる、軽妙で洒脱なフジツボ類についてのすべて！楽しみながら勉強するためにお薦めの一冊。

●荻野みちる著「クジラの死体はかく語る」 pp.214 講談社 ¥1,400+税 (2005)

高濃度の水銀、PCB、そしてドーモイ酸の恐怖！クジラの体内汚染が教える、日本人だけが知らない海からの非常事態メッセージ（同書の帯より）

6. 連載エッセイ(9)

自分さがしの自然観察—私たちはなぜ生きている?— 横濱康継(南三陸町自然環境活用センター長)

第三章 生まれたから生きている

愛という名の鉄格子

春になると、南の国から飛来したツバメが家々の軒下で巣作りを始める。やがて愛らしいひなが巣ごとに数羽ずつ誕生し、親ツバメが虫をくわえて戻ると、ひな達は顔全体を口にしてピーピーと叫ぶ。温帯の海に浮かぶ島国ならではの原風景のひとつと言ったらよいだろうか。

私が三十四年を過ごした伊豆下田の臨海実験所でも、またその後の人生を過ごしつつある志津川の「チビッコ研究所」でも、研究室の窓外の軒に、毎年いくつもの巣が作られる。下田へ赴任したばかりの頃の私は、我が子達が幼く愛らしいだけの存在だったためか、巣の中で横一列に並び親に餌をねだる子ツバメ達に、自身の子供達の姿を重ねていたのだが、いつの頃からか、必死になって虫を捕らえては子ツバメ達の大きな口へ運ぶ親ツバメの姿に、自分を見るような気分になっていた。

なぜあれほど必死になって親ツバメは子供達を育てるのだろうと、つい思ってしまうのだが、そんな疑問には、「本能だからあたりまえ」とか、「親が子を育てなかったらツバメもヒトも絶滅する」などという、確信に満ちた答が返ってくる。またある種の教育者などは、「だから親はありがたい存在なのだ」と胸を張る。しかし私のようなある種の人間は、「なぜそんな本能が生まれたのだろう」とか、「親が子を育てるのがあたりまえなら、なぜ人間の世界には子を育てない親が居るのか」と更なる疑問を抱き、はては「親とは本当にありがたい存在なのだろうか」と疑ってしまう。

小中学生あるいはこどものままの心を持つおとななどからは、「可愛いから」という答えが返ってきそうな気もするが、たしかに私達は我が子を「可愛い」と感じ、子のためにはいのちさえ惜しくないと思ってしまう。しかし親ツバメ達は「可愛い」と感じたとしても「いのちも惜しくない」などと思う心は持っていない。それなのに彼らの子ツバメ達に対する行動と私達の我が子を愛する行為とがそっくりなのはなぜだろう。

「親が子を育てなかったらツバメもヒトも絶滅する」は正解と言えないまでも、「可愛い

から」よりは客観的で、ツバメやヒトという生物を産んだ進化のカラクリにも目を向けさせてくれる。

子の面倒をよくみるほど子孫は生き残りやすくなるはずなので、進化の途上で子育てという行動は生まれ、さらに高度化を辿ったと言える。そして最も高度な子育てをする動物としてヒトは出現したのだが、その中に子育てという遺伝的習性を突然変異などによって失った個体が生まれたら、その個体の子孫はほとんど残らないだろう。そのため今の世に生きている私達のほとんどは「必死になって子を育てる」という習性を持った親の子であり、その習性を遺伝的に受け継いだ私達は「必死な子育て」をしてしまうのである。最近になって我が国では幼児虐待や子育て放棄などが目立つようになったが、これはどのように理解したらよいのだろうか。

「必死な子育て」をするツバメもヒトも、四億年前頃の祖先は魚だったのだが、現代の海や湖で暮らす魚類の中にも子育てをする種類は多い。海中では魚類より下等な仲間の中にも子育てをする種類が見出せる。エビやカニの仲間ですぐはなながらカマキリに似たワレカラ類のある種類の親は、無数の子供を体中にしがみつかせて、魚などに食べられないよう必死に守っているように見える。

同じ海中に住んでいても、ウニなどの仲間は卵や精子を海水中に放出するだけで、海水中でそれらが受精して生まれた幼生達は、しばらく動物プランクトンとして漂いながら、自力で植物プランクトンを食べ、やがて海底で変態して親と同じ形になる。ウニなどは、子供の面倒は一切みないのだが、卵や精子の生産には多量の栄養を費やす。ウニは年に一度成熟期を迎えて卵や精子を放出するので、海藻がよく茂った海底で育ったウニは、成熟期あるいはその直前に殻を開くと、体腔と呼ばれる空間が、卵や精子の黄色いかたまり（卵巣あるいは精巣）でほとんど埋め尽くされているように見える。

ウニの食欲は私達には信じられないほどに旺盛である。海底を這いながら、体の下面の中央にある五本の爪を合わせたような口器で、海底に生えた海藻などを食べ続ける。摂取した栄養は、ごく一部が緩慢な運動と殻などの成長に費やされ、大部分が卵や精子に変わるため、ウニは寿司の上ネタなどを効率よく生産してくれる重宝な動物のように私達の間には映る。ウニはそれほどまでに卵や精子を生産することに精力を集中しているのであり、これもウニにとっては「必死な」子作りと言える。

子の面倒をみないウニのような動物は、そのかわりに大量の卵や精子を産むのだが、動物の世界では、高等な種類になるほど子を少なく産んでよく面倒をみるようになるという傾向がみられる。似た傾向は植物の世界でもみられる。陸上植物の祖先に近い緑色の海藻の仲間は、卵や精子にあたる大量の雌性配偶子や雄性配偶子を、ウニと同じように海水中へ放出するだけだが、陸上植物により近い淡水産の車軸藻になってからは、卵は親の体に付いたまま受精とそれに続く発生を行う。車軸藻が上陸してコケ植物やシダ植物になってからは、卵は造卵器という壺状の器の中で卵が生まれるようになったのだが、種子植物に進化してからは、卵を産む雌の体ごと雌しべの根元の子房という密室の中に完全に閉じ込

め、そして受精卵から育った胚とそれを抱く胚乳という名の母親を包むカプセルを形成するまでになった。このカプセルを私達は種子と呼んでいるのである。

高等下等にかかわらず、あらゆる生物は子作りや子育てに工夫を凝らしているように見えるが、これを「生き残るための戦略」などと称することがある。大変わかりやすい表現ではあるが、生物は生き残るために生きている、つまり生物は「生き残る」という目的を持っていることになってしまう。地球上の最初の生物は太古の海中での化学反応によって生まれたのであり、その後の進化も化学反応によって進み、その結果生まれた私達の体のはたらきも、意識や本能的感情から思考までを含むすべてが、化学反応によって生じているのである。もし生物が目的を持っているとしたら、化学反応が目的を持っているという、大変妙なことになってしまう。

私達の我が子を可愛いと思う感情も化学反応によって生ずる。このように考えると、ヒトが思春期を迎えて異性に愛情を覚え、ある衝動的行為に走ることに、ウニが何らかの刺激に反応して卵や精子を放出することとの間に、大した距離はないように思えてしまう。しかし進化の結果とはいえ、私達は、あらゆる動物の中で例外的と言えほどに発達した脳を持ってしまい、恋愛や結婚そして出産後の長期間におよぶ子育てというように、子作りにも大変な手間をかけなければならなくなってしまった。これは人生の喜びそのものであるとも言えるのだが、恋愛感情も出産後に生ずる我が子への愛情も、すべて私達を拘束する巧妙な枷として働く。これを「愛という名の鉄格子」とでも呼んだらよいだろうか。

柄にもなく文学的な表現をすれば、「進化とはさても巧みな鉄格子を作り出したものかな」と嘆息することになるが、私達ヒトという動物のほとんどは、思春期を迎えると、喜んでこの「鉄格子」の中へ自発的に入ってしまう。ただ恋愛期の、あるいは結婚後であっても子作り前の「愛という名の鉄格子」は、簡単に脱出できるほどにやわで、針金よりはややましといった程度の鉄筋でできているのではないかという気がしてしまうほどだが、子を出産した後の「鉄格子」は強固な鉄骨で作られているのではないかと思えるほどで、私達はそこから容易には脱出できない。それでもまれに育児放棄、ひどい場合は子殺しという形の脱獄事件が起こる。実は「愛という名の鉄格子」は、私達自身の心が作り出したものなので、その心を失うと消え去ってしまうのである。

では、私達が子を出産直後から強固な鉄格子の中へ入り、二〇年前後もそこにとどまらなければならないのはなぜだろうか。ごくあたりまえな生物学者としての答は「ヒトは哺乳類の中で形態的にも機能的にも最も成熟度の低い子を産むから」となる。爬虫類や鳥類は、栄養を多量に含んだ卵を丈夫な殻に入れて生み出し、子はその中で運動機能がかなり発達するまで育つことができる。爬虫類から進化した哺乳類の子は、同じ程度に育つまで母親の体内で養われ、誕生後も母乳を必要とする。なかでもヒトの子は、歩行できるようになるまで一年近くを要するほどに未熟な状態で誕生し、その後も社会生活に参入するまで、二〇年前後におよぶ学習を必要とする。その間の親は難行苦行を強いられているように、第三者の目には映るが、当人達のほとんどに、とくに子が幼いうちは、全くその自覚

はなく、そこから逃げ出そうともしない。それはきわめて巧みに作られた「愛という名の鉄格子」の中に収監されているからである。

私がまだ「学習中」の少年だったころ、千葉県内の自宅から東京都内の高校や大学まで二時間以上もかけて通学する私や兄のために、母は厳冬にも未明からの朝食の仕度を欠かしたことがない。そんな母の姿を私は感謝に不思議さの混ざった思いで眺めていたのだが、結婚し子育てを始めてからその謎は解け、「感謝する必要もなかったのだ」と思い知らされることになった。

夫のためには朝食の用意もままならなかった妻が、我が子が初めて幼稚園へ登園する朝になったら、早々に起き、いろいろなおかずの詰まった可愛らしい弁当まで作ってしまう。このような時、夫は非常な衝撃を受け、そして私のようなある種の間人は、「我が子に対する愛情も欲望だったのか」とあらためて気づく。

異性に対する愛情は、どのように美しく形容しようとも、食欲と同じような欲望の一種であるということを誰も否定できないだろうが、親の子に対する愛情は非常に崇高なものである、というのが「社会通念」のようであった。そのせいか、私の小中学校時代に悪童で鳴らしていた級友が、早々に結婚して子育てを始めると、「親のありがたみがわかった」と誇らしげに語った。当時まだ私は学生で独身だったが、親になってから「親のありがたみがわかる」とは少々独善的ではないかと感じた。そして子育てを始めてからの私は、その級友とは反対に、「親の愛情は欲望なので感謝する必要などない」と気づいたのである。私も子の親になってみて、子に対する親の気持が例えようもないほど切ないものであるとわかり、両親に対する共感と同情を覚えたが、この共感と同情を感謝の念にすり変えてしまう人は圧倒的に多いようである。そして親に感謝することなどほとんどなかった「親不孝者」も、親になったとたんに、「親は感謝されるべき存在である」と思い始め、やがて子に「親孝行」を強要するようになる、などということもありがちのような気がする。

かつての落語などに、「誰に産んでもらったと思っているんだ」と怒る親に向かって「誰が産んでくれて頼んだ」と反論する息子が登場し、当時の社会通念では、そんな息子は親不孝者の典型とされていたのだが、理屈の上では親のほうが負けである。

もう少し息子の味方をすれば、「したくもない勉強や仕事をしなければならないこんな世の中へ生まれたくなかった」となる。芥川龍之介の「河童」という小説の中に、河童の父親が胎児に対して生まれたいか否かを問うという場面があったが、私達人類も、誕生前に成人なみの知識や判断力が備わるとしたら、多くの胎児が出生を拒否するにちがいない。しかし現実には、子は親を選ぶことも許されずに生まれてしまうのである。

今から約二千五百年前に一国の王子として生まれたシャカは、当時の社会では最高に恵まれた環境で育つことができたはずなのだが、むしろ最も苦悩した人と言える。そして「ヒトも自然の一部である」と悟りながら、「生物はみな哀れ」とも感じたという。すべての生物は、出生直後から生死を分ける無数の関門を通過しなければならない。ウニが一生の間に産む卵は数億箇に達するはずだが、そのうちおとなになるまで生き残れるのは数えるほ

どでしかない。ヒトはウニなどとは比較にならないほど初期死亡率の低い生物だが、その代わりに、すべての生物の中で例外的と言えるほど高度に発達してしまった脳は、私達の人生を苦悩に満ちたものになっている。

出生した私達を待ち受けるのは、数知れない苦難と試練である。自分が先に死なない限り、肉親の死には必ず出合い、子や孫に先立たれてしまうこともある。そのような場面で私達は耐え難いまでに苦悩するが、苦悩こそは、脳の発達しすぎたヒトという生物に特有の心の働きである。「人生は苦悩に満ちていても楽しいこともあるから生きる価値がある」などとも言われる。しかし、全人類の中で最も幸せな人生を送ってきたと自認している私も、もし子や孫に先立たれたら、全人類のなかで最も不幸な人物になったと思ひこみ、生きる気力さえ失ってしまうだろう。

私達は誰でも、愛する者の死などに対する不安に怯えながら暮らしているが、連日の悲しい事故や事件についての報道によって、その不安が現実のものにならないという保証のないことを思い知らされる。しかも私達の心は、見知らぬ人の悲しみを共感するようになったため、毎日のニュースにも苦悩しなければならないのである。

悲しみと苦しみに満ちた世界に私達は生まれてしまう。「うまれる」は「うむ」という動詞の受動態で、「出す」という動詞の「出される」にあたる。つまり私達は両親の行為によって一方的にこの世に産み出された「被害者」である。しかし、私自身もすでに子作りをしたので、加害者にもなってしまったうえに、私の子達も孫という被害者を産んでしまっている。

被害者である子は、加害者である親に、損害賠償を求めたいところだが、親もその親から被害者として生まれたのだから、損害賠償の請求は、次々と祖先へ向かって転送されなければならない。ところが二〇万代から三〇万代もさかのぼると、請求の相手は類人猿になってしまう。そして四〇億年ほどさかのぼれば、生物かどうかもわからない有機物の集まりのようなものになってしまうので、私達という被害者を産んだ究極的な責任は太古の海中で起きた化学反応にある、ということになってしまう。

被害者としての私達からの損害賠償請求書は、四〇億年ほどもさかのぼって、生命誕生の舞台にまで送付されることになるとも言えるのだが、実際には多くの生物の親が子という被害者を生んだ罪を何らかの形で償っている。私達や親ツバメ達の「必死な子育て」は、まさに服役の状態と言えるが、ツバメも私達も「愛という名の鉄格子」の中に収監されているために、重労働を強制されているという自覚はないのである。

我が国では、物質的な豊かさが増すにつれて、なぜか若者達が不満を募らせるようになってきたが、両親の勝手な行為でこの世に生まれたことへの被害者意識の現れとも言えそうである。加害者側の親の服役状態に問題がある可能性も大きいですが、親がどれほど模範囚であろうと、ツバメなどの子と違って、ヒトの子はさまざまに苦悩することを避けられない。しかし苦悩という心の働きは、類人猿からの進化が進むにつれて強まったはずなので、苦悩についての損害賠償を請求しようにも、その相手は進化という化学反応以外にない。

性的に成熟する思春期を迎えた若者は、苦悩に耐え難く、自分を産んだ加害者である親に反抗したり、反社会的行動を起こしたりしても、間もなく自分も子を産んで加害者になってしまい、親と同じように「愛という名の鉄格子」の中で、育児に始まる強制労働に服さなければならなくなる。生きるに値しないほど悲しみと苦しみに満ちた現世に被害者として生まれても、やがて加害者となり「愛という名の鉄格子」の中に収監されてしまうために、私達は、少なくとも「刑期」を終えるまで、必死に生き続けることになるのである。
(次号につづく)

7. 事務局便り：

- 企画案などその他なんでも本会の活動に関することは、事務局あてにお寄せください。
- このメールマガジンは、毎月1日と16日の2回発行の予定ですが、都合によって遅延や中止もあります。配信を希望する方、送りたい方がありましたらアドレスをお知らせください。また、パソコンを使えない環境の方には印刷体でもお届けします。その場合は、郵送料をご負担していただくことがあります。
- このメールマガジンは転載自由です。海の生き物に関心を持っている方に広く読んでいただくために転送をお願いします。ただし写真を別の目的で使用する場合は事前にご連絡ください。海の生き物や守る運動についての情報など、また各地で行われている海の生物の観察会、研修会、その他の行事に関する情報もお寄せください。「うみひろも」のバックナンバーは、ホームページからダウンロードできます。
- 本会は自然観察会や講演会を各地で実施しています。各地で開催を希望される方、開催をお手伝いできる方は、ご一報ください。また、各地の団体との共催も行います。ごいっしょに講演会や観察会をしたいと思われる団体からも提案をお受けします。
- 本会へのカンパをお寄せください。口座はゆうちょ銀行 口座番号：10610-6673021 海の生き物を守る会へ。

8. 編集後記

NPO が主張してきた漂着ゴミ対策法が成立するなど、海洋保護関係においても市民の意見が重要になってきています。8月には総選挙が行われ、政権交代の可能性が大きいと言われています。民主党はこれまでの政権と異なり、NPO との連携を進めていこうとしていると報道されています。海の環境と生き物を守るために、行政や法律に何を求めるべきか、今後とも積極的に考えていかねばなりません。みなさまからのご意見をお待ちしています。
(宏)

9. 「うみひろも」と「海の生き物を守る会」について

この「うみひろも」は「海の生き物を守る会」のメールマガジンです。配信が迷惑と思われる方は事務局までご連絡ください。

海の生き物を守るためになにかしたい！というあなたに！

会員募集中です！

会員は本会の趣旨に賛同できる個人・団体とします。会費は個人 2,000 円／年、団体 20,000 円／年。匿名による参加も可能です。会員は、当会の名前を使って各地で海の生物とその環境を保護・保全する活動を行うことができ、そのための助成金申請をすることができます。活動は当会の発行するメールマガジンなどを通して広く通知されます。入会希望の方は、事務局 hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp（向井）まで、氏名、住所、メールアドレスをお知らせください。

事務局員も募集中！

事務局を手伝っていただける人を探しています。パソコンでメールが使える環境にあれば近くにいらなくてもお手伝いいただけます。ただし、無収入ですので海の生き物の保全・保護に関心とボランティア精神のある方。

メールマガジン『うみひろも』第43号 2009年7月17日発行

発行&編集人「海の生き物を守る会」代表 向井 宏

〒606-8244 京都市左京区北白川東平井町 23-1 グリーンヒル北白川 23

TEL&FAX:075-703-7205; 090-8563-1501

メールアドレス：hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp

ホームページ URL：<http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html>

銀行口座：ゆうちょ銀行 口座番号：10610-6673021 海の生き物を守る会

